

第 253 回研究報告会 (10 月 18 日)

「識字神話をよみとく」をよみとく 角 知行 (人間学部)

筆者は本年 9 月に『識字神話をよみとく—識字率 99%の国・日本というイデオロギー』という本を明石書店より刊行した。本研究報告会では、その概要の紹介をおこなった。

日本は教育水準がたかく、近世・近代をとおして識字率もたかかったとされる。しかし、近年の研究によれば、江戸時代に全国規模の識字率を推計することは無理がある。地域差や階層差がおおきいからだ。ましてや、それを世界と比較することも困難である。

本書第 I 部では、近代における「識字率 99%=世界一」という説もまた根拠がないことを解明しようとした。それは就学率と識字率の混同から生じた俗説であり、戦時下にプロパガンダとして流布され、戦後もいきながらえたとすぎないのである。

日本人や日本語がとくに優秀であったり、特異であったりするわけではない。第 II 部では、漢字の音訓二面性を評価する漢字擁護論の言説の分析をおこなった。

日本も諸外国とおなじく非識字者や限界的識字者をかかえた社会である。識字学習という教育的営為だけに還元されない、識字社会のありようを変革していくところみかもとめられる。第 III 部では、識字作文を素材にして、識字のエスノグラフィーによって、識字社会の支配構造の一端をえがいた。

(8 頁からの続き)

順調に進展するようにロレーの聖母マリア教会、アッシジの聖フランチェスコ教会に巡礼に出かけた。また、「過ちを犯したのは教会ではない。過ちを犯したのは教会の人間である」と述べたという。さらに「近代化のためのグローバリゼーションの足かきを作った」とも語っている。

現ローマ法王ベネディクト 16 世は、第二ヴァチカン公会議に出席していたうちの数少ない生存者の一人である。公会議の開催時は 35 歳であって、その当時すでに若き神学者として知られていた。そして当時の枢機卿ヨゼフ・フリングスの相談役でもあった。現法王は、1962 年 10 月 11 日ヨハネス 23 世が、夜に自分の書斎の窓から「月夜の話」をしたことを鑑みて、2012 年 10 月 11 日、やはり、同じ書斎の窓から、サンピエトロ広場に集る人々に「信仰の年」の開催を宣言した。

現法王は、第二ヴァチカン公会議の内容は、その後の教会にとって、「羅針盤」であると規定している。さらにキリスト教は将来の型を与えるために現在をしっかりと生きなければならないという。「私も 50 年前には、この広場から書斎の窓の所にいるヨハネス 23 世を見上げ、希望と喜びに満ちていた。新しい春、新しい五旬節が来たようだった。今日もまさしく、我々は幸福であり、冷静さの中の喜びでもある。聖ピエトロの漁の網の中にも良き魚も悪い魚もある。船が進行すれば、逆風の場合もある。私たちは、ここ数年の精神的砂漠化を克服するために、公会議録を読み、福音を告げよう。主はいるのだ。私たちが忘れてはいない。キリストは常にわれわれと共にいるし、今日も幸せでいられるだろう」と結論づけている。

第 9 回奈良県宗教者フォーラムに出席

堀内みどり

9 月 29 日、標記フォーラムが東大寺金鐘ホールを会場にして開催された。「神と仏と日本のこころ—修験の歴史的展開—」をテーマとした今回の講演会では、一昨年から続く「修験道入門」の 3 回目として、二つの講演があり、約 330 名が参加した。

講演 1 では、久保田展弘アジア宗教・文化研究所所長が「平城京奈良—天皇と神と仏の出会い」として講演。平城京では、その背景となっている自然環境や世界から伝えられた知恵が宗教的営みの中で積極的に展開されていた。無縁社会と言われる現状では、少しでも宗教に触れることで心の落ち着きが得られる。奈良時代に実践されていた宗教的な営みが、現代につながるとし、真似事でもいいからお経などを唱えるという宗教的アプローチが救いへとつながるのではないかと呼びかけた。

講演 2 では、宮家準慶応大学名誉教授が、豊富な資料をもとに「奈良を中心とした修験の歴史と活動」について講演。修験道のイメージから話を進め、奈良を中心とした修験の分布や数々の遺跡や現在にいたるまでの修験の活動に触れた。また、天理教の教祖が神懸かりになったときに加持台になったことにも触れ、儀礼、思想、組織における天理教と修験とのかかわりに言及した。

講演会に先立ち、東大寺大仏殿で行われた「日本復興祈願祭」では、東日本大震災や紀伊半島豪雨の被災地復興祈願が行われ、宗派の異なる宗教関係者が一堂に会し、各宗派のお経を読み上げ、祝詞を奏上し、天理教の代表は、「よろづよ八首」を奉唱した。

なお、奈良県宗教者フォーラムは、日本のこころと宗教の役割を考える宗教者のフォーラムとして、平成 16 年に第 1 回「宗教者のめざすもの」を開催し、第 7 回 (平成 22 年) からは一般にも公開する形での講演会となった。「混迷する地球現代のなかで、日本宗教のあけぼのの地でもある奈良から宗教が果せる役割を探ります。日本文化の基層をなす『共生』や『和』の精神が育まれた奈良の地。対立ではなく、多様性を尊重する『信仰聖地』として、アジア、そして世界へ平和の光を発信することを願います。」という願いのもとに設立された。

平成 24 年度特別講座「教学と現代 9」ご案内

おやさと研究所では、今後 3 年間のシリーズで「海外伝道の現状と課題」を特別講座「教学と現代」として開催することになりました。シリーズ第 1 回にあたる「教学と現代 9」では、アメリカ、ハワイ、ブラジルの各伝道庁長をお招きして講演いただく予定です。

これらの国や地域に共通するのは、天理教の教えが初期には主として日系移民を対象に広まり、世代を重ねるにしたがって現地の人々にも布教伝道が行われるようになってきたということです。

幾多の時代を経て、今日、これらの国や地域における宗教状況、布教伝道の現況、世代を重ねての信仰、さらなる現地化を目指しての課題などについて、伝道庁長のお話を聴き、海外伝道における本教の課題について共に考えて参りたいと思います。

・日程：平成 25 年 1 月 29 日 (火曜) 午後 1 時～5 時

・場所：天理大学研究棟第 2 会議室

ご関心のある方は担当の者までご連絡ください。

「教学と現代 9」担当 金子 昭 akira-k@sta.tenri-u.ac.jp